上賀茂の場所と景観

御阿禮神事との関わりから

SCENIC PHENOMENON ON THE TOPOLOGICAL STRUCTURE
IN KAMIGAMO AREA

On the relation to 'Miare-Sinji' ceremony

熊澤 栄 二*

Eizi KUMAZAWA

The purpose of this study is to consider a scenic phenomenon from the topological viewpoint. In this paper, a whole structure of places is suggested through the analyses of place-names around 'Kamowakeikazuchi-jinja' shrine, especially the place-name called 'Kamitsuyo-no-Ura' bay. The summary of conclusion about the analyses is as follows: the first, a daily structure of places on Kamigamo area is found out as double topological structure which gives the area systems of disposition and signification. The next, 'Kamiyo filed' is suggested as one of the fundamental dimensions on which the topological structure bases, through the interpretation of 'Shin-Kokin-Wakashū' poem no.1868.

keyword: scenic phenomenon, place, Kamowakeikazuchi-jinja shrine, Kamitsuyo-no-Ura, Shin-Kokin-Wakashū poem no.1868

景観的事象, 場所, 賀茂別雷神社, 神代の浦, 新古今和歌集 1868 番歌

1. 序

本研究は、宗教的儀礼などにみられる非日常的な世界経験を通して顕われてきた景観の諸相¹⁾を建築論的な立場から繙こうとする試みである。言い換えるならば景観の諸現象（以降「景観的事象」とする）について「人間と環境」の関わりという論点から考察しようとするもの²⁾である。よって本研究を通して「建築論的」と言われることは「人間と環境」との関わり合いを考えるという程の意味³⁾になるが、さらにこの景観的事象を「場所」の現象として把握することが試みられる。要するに人間-環境-建築の問題を考察するための、それら問題の根あるいは共通の基盤というべきものを改めて「場所の問題」として注目するものである。

以上の考察の枠組みのもと、京都盆地北郊に鎮座する「賀茂別雷神社」通称「上賀茂神社」に関係深い諸場所を対象として考察を進めたい。特に副題でも示したように「御阿禮神事」に注目する理由は上賀茂神社の「根源祭」と位置づけられる如くその起源は極めて古く⁴⁾それ故、先に参照されたような人間と環境との生きた交流の証が刻まれていると十分に予想できるからである。それでは神事という場において現象する景観あるいは神がそこに於いて「御生れる」景観とは如何なるものであろうか。まずは景観的事象の定着を目指して考察を始めることにしよう。

2. 御阿禮神事について

2.1 神事の儀礼過程

御阿禮神事は五月十二日深夜、上賀茂神社北北西約五百メートルに位置する御生所にて祭神である別雷神を迎える祭儀である。同日日中に鴨御祖神社、通称下鴨神社においても「御蔭神事」と称して比叡山西麓の御蔭神社から祭神二柱を迎える祭儀がある。五月十二日に上下賀茂社にて祭神を迎えた後同月十五日に日本三勅祭の一つ「葵祭」が斎行される。現行式次第は以下の通りである。

- ① 五月十二日午後八時、宮司以下諸員は御生所に参向、神籬前の横座に着く。祭員五官は神籬に公幣・私幣を捧げ、葵桂を烏帽子に挿し、献饌の上「掴みの御料」⁵⁾。手水の儀の後、榊神事（燈火を滅し秘歌を奏する）が行われる。
- ② 矢刀禰(神人)御櫛(五輩)を捧持して神籬の前の立砂二基を三匝、立砂の中間に南面縦列して蹲踞し待機。その後宮司以下祭員は神籬と本殿との中間南東約百五十メートルに位置する神館跡に移動。
- ③ 矢刀禰御櫛を捧持して神幸に発進。御櫛が神館跡を通御する際、宮司以下祭員は正笏平伏し秘歌を黙奏。
- ④ 御櫛二輩を榊尾社大床に樹て、残り三輩を東切芝内の遙拝所に樹てる。その後宮司以下祭員は神館跡より本殿の各本座に着座、祭典を行い退出、社務所にて直会を行う。

本論文は、平成8年度日本建築学会近畿支部研究報告集に発表したものを元に、その後の知見を加えて加筆・再編したものである。

* 京都大学大学院工学研究科 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.

以上が現行神事の概要であるが、要するに本殿北にある御生所の神籬にて別雷神の降臨を願い、境内まで神幸して祭神を迎えるのが御阿禮神事の骨子であろう。

2.2 御阿禮神事の起源

さて、「此賀茂大神たちの古事の考は、もはら賀茂縁起、賀茂舊記、山城風土記を表章し」⁹⁾と言われるように、神事の根基は『賀茂舊記』⁷⁾に求めるのが順当であろう。

舊記云、御祖多々須媛命、始遊川上、有美箭、流來依身、即取之挿床下、夜化美男、到相副、既知、任身遂生男子、不知其父、於是爲、知其父、乃造宇氣此酒、令子持杯酒供父、此子持酒振上於天雲、而云吾天神御子、乃上天、于時御祖神等、戀慕哀思夜夢、天神御子云、各將逢吾、造天羽衣天羽裳、炬火擎鉾、又飭走馬、取奥山賢木、立阿禮、垂種々緑色、又造葵楓縹、嚴飭待之吾將來也、御祖神即隨夢教、令彼神祭、用走馬并葵楓縹、此之緣因也、山本坐天神御子稱別雷神。

三書何れについても細部において微妙な差違は見受けられるものの、大略において賀茂川における玉依日売の神婚譚と別雷神の天昇、そして再臨の神告という三部から物語が構成されていることは確認できる。しかし御阿禮神事の根基として、玉依姫の神婚譚にその根基を求めるべきか、あるいは再臨の神告にその根基を求めるべきか、は研究の立場によって諸説意見が分かれるところであろう。

まず、後者については『神道大事典』によれば『賀茂舊記』の後段部分を引用しつつ「神告を得て祀り給うたのが、この祭の起源である」⁸⁾と説明している。しかし座田司氏はこのような神告を起源に求める説に対しては「蓋しこの傳説は御阿禮祭の始行の状景の説明であって、これによつて起源を云ふべき性質のものではない。去りながらこの傳説にも存する如く、御祖神等が始めて別雷神を祭られたと云うことだけは想像し得られるのであろう。」⁹⁾と消極的な見方を示している。

前者の立場をとるものとして、平野仁啓は「御阿礼神事はもとは、ワケイカツチ神を生みだす神事であったはずである。タマヨリヒメはホノイカツチノ神と神婚をすることによって、ワケイカツチノ神を生む阿礼乎止売（斎祝子）である。」¹⁰⁾と説明する。あるいは折口信夫は「みあれひく賀茂の社の祭りも、此信仰から出てゐる。稚雷の神出現の日に、毎年賀茂川を斎川をして、稚雷神の用る始めた後、諸人此水に浴したのがみあれまつりの本義である。」¹¹⁾と喝破している。一方、肥後和男は「而して斎院が特にアレオトメの性格を主とし、玉依日女的な觀念をもつて居ないのは、行事の中心が矢取よりもミアレに推移したことを示すものではないか。」¹²⁾と推測することにより「矢取り」の側面が強調されている。根本的な概念である「ミアレ」についての解釈の位相の違い¹³⁾が、このような神話解釈の視点を決定的なものにしている。

以上諸説を検討し、御阿禮神事の根基を管見の及ぶ限り見てきた。あらゆる換骨奪胎にもかかわらず有史以前から現在に至るまでの間絶えることなく斎行されてきた神事のこの悠久の歴史性は、「ミアレ」の理解によって諸説異なるものの、玉依日売による別雷神の神産みという宗教的事実を奉斎氏族が確信することによって支えられてきたと解することに異論はなかろう。しかしこのような神産み伝承は如何なることに即して確信されるのであろうか。確かに推測の域に留まらざ

るを得ないが、次に挙げる論考に注目してみたい。

真弓常忠は「神は天空の彼方から降臨して奥山の森にひそみ、時に人里を訪れてくる。川の流れば神の靈威が人里に往来する自然の通路に当り、また人里を訪れる神靈は幼童の姿の子神である。」¹⁴⁾といい、あるいは肥後においては「この川上より神の物實が流れ下るとする考えは、人寰を離れた山谷幽遠の間に、神の住むべき清浄なる世界を設定したことに起因するが、これは日本の如き地形に於ては必然に起り得べき思想」¹⁵⁾とされる。幾分論旨は粗いものの、「川」や「山谷」の様態あるいは本稿の関心に引き寄せて「景観」とも言われるべきものが、別雷神のミアレを確信せしめる前提をなしているとも解されるであろう。即ち、神の降臨にはその事態に相応しき「自然」が前提されているかの如くに、あるいは真弓が指摘する様に、神は空や川を「自然の通路」とし、天空の彼方や山谷幽遠の間から降臨する、とも言い換えられよう。

以上の考察は、「人間と環境」との関わり合いの様相を景観的事象として把握する本稿に対して、所謂山や川の意味での自然的な景観という枢要な論点を明らかにする。つまり上賀茂の自然の景観が神のミアレの確信を支えてきたとするならば、その前提として上賀茂の地域全体はそこに定住してきたものにとって如何に経験されてきたか、という新たな問題を展開させることは可能であろう。以下この問題を受けて、上賀茂の地の日常的な場所理解とともにその理解を支える構造について考察を進めることにしたい。

3. 上賀茂の場所と地名

前節で見てきたように、賀茂別雷神の御生れには、それを支える所謂、舞台の如き山川の景観が前提されていた。そしてその山川が民族学・宗教学においては「幽遠」や「神秘」といった日常を越えた在り方¹⁶⁾で理解されているならば、寧ろ越えられるべき日常的な理解に於いて上賀茂の地全体が通常如何なる場所として理解されてきたのか、十全な形で明らかにする必要がある。そのために特に近世の史料¹⁷⁾にあらわれた上賀茂の地名を「野」「山」「川」という個別の範疇（以下、「場所範疇」と術語化する）において分類し、その範疇をもとに次節において上賀茂「全体の場所性」を明らかにしたい。

3.1 野

①御生野（御生所野、御形野、御祓野、假寝野邊）

- a. 上賀茂神山西北の地にして賀茂大明神始めて來現の地なり毎年四月初の酉の日社家此所にかりに宮をしつらひて社司氏人村民に至る迄をのへあふひかづらをかけて參詣す(京羽・二/2/362)
- b. 賀茂の明神はじめて。出現の所也。つぶさに御生所山のごとし。(名都・三/5/65)
- c. 昔日白鳳年中大己貴命下賀茂二影向アリ其後四月酉ノ日上賀茂別雷神ノ麓御生所地二瓊々杵尊影向アリ(上行/12/15)
- d. 或作御陵野上賀茂神山西北之地而賀茂明神始出現之處也每年四月初酉日社家設假宮於斯處社司氏人土人各懸葵桂於衣鉢(雍府/10/599)
- e. 御生前の事也本宮より奥五六町ほど戌亥のかた也此邊に船着神代ノ浦など云所有入江といふ所も有此御生野には毎年四月中の酉日葵祭を行ふ所也まづ午の日御生野に櫛にて假宮をかまへ天孫來現の儀をなす(菟・五/12/437)

f.上賀茂の北に御生所野といふ所神山の西北にあり賀茂の明神初めて出現し給所也。(京勝/12/652)

g. 天の岩船を漕よせ現形まし ける其所を御生所といふ其御あれ所のわたりを御形野とも神代の浦ともいひ舟着きの入江ともいへり新古今二入

やまとかも海に嵐の西ふけば

いづれの浦に御舟つながん

といへる歌は賀茂祭の午の日詠じとなへ侍る古歌也

或云御生野御生所ハ同所也本宮乾方也假寝野邊トモ云フ今號=御生壇=斎院假殿舊跡也(山名・十一/14/16)

①御祓野 (御生野, 御形野, 御旅所)

h. はじめの御生所の事歟。(名都・三/5/65)

i. 花鳥二玉依姫ノ別雷ノ神ヲウミ玉ヒシ所ナリ。御生トモ御形トモカケリ祭ノ前ノ日ヲミアレノ日ト云ナリコノ處愛宕郡高野ノ方ニアル御影山ト一所ナリトイヘリ。(京巡・十四/11/286)

①上賀茂御壇 (御生壇, 御生所, 假寝野邊, 神館)

j. 上賀茂山也。賀茂明神御生所の地なり。毎年四月初酉の日あふひ祭あり。松杉を以て假宮を此所にかまふ。まさしく壇といふは。此山よりすこし南のかたなり。(名都・六/5/178)

k. 或云御生野御生所ハ同所也本宮乾方也假寝野邊トモ云フ今號=御生壇=斎院假殿舊跡也葵祭ニ注連ヲ引キタル所也又少此方神館ト云所モアリ。(山名・十一/14/16)

l. 御旅所 在=本宮北一町許=道西有。岡是曰=御生所壇=馬場先東也祭前日假殿立=此地=(山名・十一/14/15)

②假寝芝

m. 神殿ノ西馬場ノ邊。芝ノ總名也¹⁸⁾(山跡・六/15/191)

③神代の浦 (ミアレ野, 野)

n. 建角身命國々を巡見天ノ命磐樟船をこぎてみかどをば神代のうらの浪靜なる磯まで送りたてまつれり因りて北山の麓に應化して百王を守り給ふ経る經津主武みかづちも同所に垂跡し給ふと云々(菟・五/12/429)

o. 賀茂ノ遠久ウタニ久カタニカタノアマノ岩舟漕ヨセシ。神代ノ浦ヤ今ノミアレ野トイヘバ。ムカシ戀ハレテ。(京巡・十四/11/286)

p. 野 神代の浦は御生野の惣名也天孫御舟にめされ降臨の地なり御生所の左方を舟着きと云(山名・十一/14/15)

④神原野 (杵野)

q. 今杵野といふ蟻が池につぎきたる野なり(菟・五/12/440)

r. 神野原ハ蟻力池ニツク野也蟻力池ハ加茂山ノ後ニアリ神原野ハ神代神遊ノ地今ハ櫛野ト云御生所ヨリ五六町良也(山名・十一/14/16)

3.2 山

⑤神山 (御生所山, 御影山, 賀茂山, 二葉山, 日影山)

a. ある説に。賀茂の明神はじめて。此所にあらはれ給ふさるによつて。御生所の山とも。御影の山とも。いふなりと。又賀茂山ともいふと也。(名都・十一/5/26)

b. 此山は。賀茂山を云なり(洛名・七/11/406)

c. 付賀茂川 岩本 橋本 賀茂山を神山といふ。社の東のかたに流るゝ水を鴨川と名づく…岩本は本社東のかたなり。在原業平をいはひたり。…橋本の社は本社にまうで行道の東の方にあり藤原實方朝臣をいはへり。(出斎・五/11/581)

d. 本宮の後ろの山を神山と云也又貴布禰路をへだてゝ西にかみこう山

といふ有本宮の戌亥に遙也又下かう山といふはみぞろ池丑寅に有かう山は神山なるべしすべて賀茂山の別名なるべし(菟・五/12/444)

e. 詞林采葉云賀茂山神山同山名也。

歴代編年集成元慶八年七月二十九日宮府云賀茂神山四至内停止狩獵

河海抄云賀茂祭前日於=垂跡石上=有=神事=號=御形 御阿禮者御生也 見=古語拾遺=

注進略記云神山加毛山同訓有=口傳= 往古此神降臨坐所有=岩根是謂=降臨石= 其神山御生 云云(山名・十一/14/15)

f. 神殿東山是也 別名二葉山 日影山 賀茂山(山跡・六/15/187)

⑤, ⑥賀茂山 (神山, 日影山)

g. 詞林采葉抄云神山日影山何レモカモ山ノ名ナリ(京巡・十四/11/283)

⑥御生山 (日影山, 日陰山, 二葉山)

h. 日陰山二葉山は上鴨神殿の本山ありて御生山此別名なり(都図・六/6/663)

i. 日影山 二葉山 此三の山は御旅所の北東の高山也(菟・五/12/439)

j. 御生山日陰山二葉山同山名也御旅所北東高山云(山名・十一/14/15)

⑥日影山 (神山, 日陰山, 加茂山, 賀茂山, 二葉山)

k. 日陰山 詞林采葉云神山日影山加茂山とも申云云(山名・十一/14/16)

l. 神山 神殿東山是也 別名二葉山 日陰山 賀茂山(山跡・六/15/187)

⑥二葉山 (日影山, 日陰山, 加茂山, 賀茂山, 御生山, もろは山)

m. 二葉山 御旅所北東高山云

夫木 家集 正三位李經

神垣にかくるあふひの二葉山

いくとせ袖の露はらふらん

同 光 俊

あふひ草諸葉の山の郭公

なれてみあれの比や待らん(山名・十一/14/16)

⑦分土山 (別土山, 賀茂別雷山, 丸山, 圓山, 正ノ岡)

n. 號=武雷山= 傳言賀茂明神現=御生所則此山也= 毎年其四月初酉日葵祭以=松杉條=構=假宮於此所=山南謂=壇(雍府/10/599)

o. 昔日白鳳年中大己貴命下賀茂二影向アリ其後四月酉ノ日上賀茂別雷山ノ麓御生所地二瓊々杵尊影向アリ(上行/12/15)

p. 片岡山のうしろに分土山あり別雷とも又は正ノ岡ともいへり御生山の東也俗に丸山といふ(菟・五/12/432)

q. 土人云別雷山同。之在=片岡山後= 御生山東也俗呼=圓山(山名・十一/14/14)

⑧片岡 (カモ山, 神山, 鶴岳)

r. 加茂ノ本社境内ニ片岡ノ社拜殿モ見ヘタリ。或ハカモ山トイヘル人アリ考ヘシ。(京巡・十四/11/282)

s. 上賀茂の北に御生所野といふ所神山の西北あり賀茂の明神初めて出現し給ふ所也。(京勝/12/652)

t. 片岡山本宮東南片岡森同前…井蛙抄云片岡森は賀茂片岡の社にて侍れば山城也…片岡土地名也仍爲=社號=亦鶴岳本宮樓門外川東南…袖中抄云中賀茂は片岡社也鶴岡に座すと云云 加茂山の本名とい

へり(山名・十一 /14/17)

- u. 神山 神殿東山是也 別名二葉山 日影山 賀茂山…片岡山(鴨山ノ別名也(山跡・六 /15/187・191)

⑨ 龜山, 龜岳 (賀茂山)

- v. 岩倉郷の中に(有(洛名・七 /11/410)

- w. 本宮後山曰 龜山 - 鎮座靈地云 龜岳 …

龜岳 在 賀茂山 - 但勅撰名所和歌集抄葛野郡(山名・十一 /14/16)

3.3 川

⑨ 賀茂川 (羽川, 加茂川, 石川, 蟬小河, 多田須川)

- a. 賀茂の御社の東のかたに流るゝ川也羽川とも云水上は車坂の麓より流れて末は三條五條の川原にながれ伏見淀川へ落る(京羽・二/2/42)

- b. 一名○御手洗川○石川○蟬小河(京鑑・横 /3/309)

- c. 名おほし 瀬見小川 鴨の羽川 石川 多田須川 みなほとつの賀茂川なり。(名都・二 /5/54)

- d. 鴨羽鴨羽河二ツニヨメリ。神ノ立マシマスユエニ下マデノ惣名ヲ鴨河ト云。専羽ノ流タル所ヲ鴨羽河ト云コレハ上ナリ。(京巡・三/11/54)

- e. 此河は賀茂社の東也(洛名・七 /11/406)

- f. 鴨羽河下鴨也 石河 瀬見小川 皆賀茂河の名也(菟・五 /12/440)

⑩ 石川蟬(瀬見)の小川(賀茂川, みたらし川)

- g. 則賀茂川也長明が歌に石川やせみの小川きよければ月もながれをたづねてぞすむ(京羽・一 /2/42)

- h. 花洛の東西にふたつの川有東をかも川と號し其みなもとの北の方雲か畑村よりなかれ出水上村すぎ上下の加茂にながるゝ其の間に石川蟬の小川の名あり(都す・下 /3/103)

- i. みたらし川をいふ。(花月 /5/561)

- j. 傳此河紆南方也(京巡・三 /11/79)

- k. 諸神記云せみの小川は只洲の社の東に有但聊北也

長明無名抄云 石川瀬見小川 是は賀茂川の實名也 當社の縁起に侍り(山名・十一 /14/9)

⑩ 御手洗川 (御祓川)

- l. 河海抄云ミタラシ河ハ神山ヨリ流イデ、加茂ノ社片岡ノモリノ中ヨリ通ル小河ナリ。能因ウタ枕ニ惣別神ノ御前二流ルハ水ヲミタラシ河ト云トゾ。(京巡・三 /11/78)

- m. 御祓川とも云本社西邊より一の鳥井に到るまでのながれを云也(菟・五 /12/433)

- n. 在 神殿左右 流水ヲイヘリ。左ハ水源本殿寅卯方ノ池ヨリ出ツ。云 蟻池。右ハ水源鴨川ヨリ流レ。(山跡・六 /15/191)

⑩ 御生川 (御手洗川, 川)

- o. 是も御手洗川と同じながれながら御戸代の邊のながれを云なるべし(菟・五 /12/437)

- p. 川 御生川は御手洗川の別名也 賀茂の御戸代は馬場先にある田畠を云(山名・十一 /14/16)

⑪ 御物忌河 (鴨川)

- q. 從 新宮東 流出而片岡前而興 御手洗川 - 流會

氏人注進略記云別雷神神社洗 神器 滌 祭供 - 之河

謂 之御物忌河 源不 混 他流 會云云(山名・十一 /14/14)

- r. 賀茂山を神山といふ。社の東のかたにながるゝ水を鴨川と名づく(出斎・五 /11/581)

⑫ 櫛ノ小川 (御手洗川)

- s. 奈良社後流御手洗川一名也(山名・十一 /14/19)

⑬ 蟻が池 (阿礼ヶ池)

- t. 御生所より五六町丑寅に有昔大なる蟻有犬の如しその故に池の名とす(菟・五 /12/440)

- u. 阿礼ヶ池ともよばれ、上賀茂神社の北、丸山の麓にある。(史京 /6/304)

賀茂別雷神社周辺図

* a. 御生所, b. 神館跡, c. 賀茂別雷神社

* * 図中記号(①など)は、地名見出の番号に従う。

尚、本図は大日本帝國測量部『京都十四號(假製地形圖)』(明治22年測量二万分之一尺圖)を基に加筆・訂正した。

4. 上賀茂の場所構造

4.1 諸場所の分析と場所の構造

日常的な場所の理解について、前節で見られた様な地名を手引きとして考察を進めることが果たして妥当であるか否かは、問題ではある。しかし柳田國男によって「何となれば字の地名は最も多くの我々の生活と結合している」あるいは「そういう地名には努めて具体的にその土地の性質を指示するものを掲げ、」¹⁹⁾と言われるとき、地名には既にその土地に於ける人間の「生活」や「土地の性質」という理解が、延いては日常に於ける場所の経験的な理解が含まれていることを指摘するのは容易であろう。つまり地名は既に場所の経験と言うべき次元に差し向けられている、と言えよう。

それでは、前節で列挙された地名群をもとに場所理解の構造を明らかにしてみたい。早速野に注目しよう。上賀茂の地は、大きくは「神代の浦」「神原野」の二つの名によって捉えられよう。神代の浦は「御生野の惣名」(n)として、神原野は「蟻が池につづく」(q,r)「賀茂山ノ後」(r)として限定されている。神代の浦であれば御生野が、神原野であれば賀茂山、蟻が池が基準となるのであって、それ自身が明確な基準をもつものではない。つまり「～の惣名」あるいは「～の後ろ」という限定の仕方は、対象となる土地を含んでその全体であり、また対象となる土地以外の全体と理解してよいであろう。即ちこれら二つの地名は上賀茂の地を全体として把握する名であることが分かる。ここ

でこのような全体を把握する名を「全体性」として性格づけるならば、それは他の具体的な規定内容をもつ地名によってその定義内容が補完されるか、あるいはそれ自身を定義する内容をもつとしても「神代神遊の地」(r)というような神話や伝承によって定義されるのみである。以後このような全体に関わる場所を便宜上、「最大の包摂者」として名づけておく。

全体に関わる地名に対して、個別的な場所は「御生野」「假寝野邊」「御祓野」「上賀茂御壇」等である。御祓野は御生野の別名(i)であり、御壇は御生野のさらに限定された場所である。これらの地名のうちに既に、行為的な表現が含まれていることは看過されてはならない。つまり「生まれる／ある」「禊ぐ／祓う」「寝る」等である。これらの行為的な表現は、御阿禮神事との関係を色濃く予想させるであろう。そして先にも触れられた様に、御生野が様々な呼び名を持ち(g)、それと同時にそれ自身の内に御生所、御壇、神館などといった更なる個別的な場所に分節される、あるいは「個別的な場所を包摂する」ならば、この意味で「包括性」という性格を御生野に見出すことができるであろう。このように、その内に具体的な諸場所を包み、多様な呼び名をもつ場所を「具体的な包摂者」として名づけておくことにする²⁰⁾。

次に山について考察を進めてみたい。山の場合、最大の包摂者は「神山」である。しかし「神山」は賀茂山をその直接の内容とする場合(a,b,c)と、所謂現在において神山といわれる「衣笠峯」²¹⁾を指す場合(d,e)、そして現在「神宮寺山」といわれる「片岡山」を指す場合(f)がある。即ち「賀茂山」の代名詞として、あるいは実際の山名として、二重の意味において「神山」が名指されている。それ故、前者つまり賀茂山の代名詞として神山が名指されている場合に限り、神山を最大の包摂者と見ていくことにする。一方「賀茂山」は野において考察された「包括性」という性格を見出すことが出来る。特に御生山・日影山・二葉山そして片岡を包摂することからも、具体的な包摂者の性格を認めることが出来るであろう。とまれ広範な山地をこの二つの名で限定していたことは明らかである。

個別的な山の名については御生山、日影山、二葉山は同一の山の名をなし、それらは現在の所謂「丸山」に妥当しよう。また分土山はその東隣の「小丸山」と推定される(p,q)²²⁾。

最後に川について川の最大の包摂者つまり全体性としての性格をもつ名は「賀茂川」である。他方、具体的な包摂者つまり包括的な性格をもつ名は御手洗川である(i,o,p,s)。野の場合同様、個別的な川の流れの名には行為的な表現が含まれていることに注目したい。即ち、「生れる／ある」「禊ぐ／祓う」「忌む」である。また川の場合、その名が示す川筋は必ずしも分流域から次のそれまでの間を言うものではなく寧ろ、「～の辺」(m,o)「～のかた」(a,r)「～の(方角)」(e,j,k,m,)そして「～の(に,を)ながれ」(d,h,l)との表現からも推測し得るように、何処の場所を水が流れているか、ということが川の規定にとって重要な意義をもつと言えよう。端的に、川の名は「間」ではなく特定の「場所」が指示されていると考えるのが至当であろう。

4.2 上賀茂の場所性

以上、野、山、川の場所範疇について個々の地名に即して分析を進めてきた。そこで近世の史料を中心にして読み出されてきた個別の場所範疇を上賀茂全体の場所的な特性つまり「場所性」に向かって解釈する必要がある。言い換えるならば、各範疇について取り出されてきた固有な性格を基礎づける基盤そのものが見出されるようにしな

ければならない。そのためには諸範疇に内在する断片的な構造を基礎づける構造、即ち「場所的構造」が明確にされなければならない。ところで上述された様に、場所範疇を分析するにあたって「全体性」と「包括性」という構造が見出されたが、場所性という観点から如何なるものとして把握されるかについては、未だに明確にはされていない。そこでこの二つの構造の連関を考察することを通して上賀茂全体の場所性を定着してみたい。

各場所範疇において全体性は、野・山については「カミ」そして川については「カモ」という形で把握されてきたことは上に見てきた通りである。これは各範疇を通して積極的に場所を規定するのではなく、寧ろより具体的な場所規定をもつ名からその所在が規定されていた。一方、包括性とは、個別的な諸場所を包摂する名の性格を意味するものとされた。野は御生野、山は賀茂山、川は御手洗川がそれである。これらの名は個別的な諸場所に分節することでそれらを具体的な内容としていた。つまり諸々の場所を以てそれらの帰趨すべき所在が規定されていると言えよう。以上の連関を纏めるならば、諸場所が具体的な包摂者の所在を規定し、さらに具体的な包摂者が最大の包摂者の所在を規定する、という構造が見出される。言い換えるならば、個別的な場所全体によって具体的な包摂者が指示され、さらにこの具体的な包摂者によって最大の包摂者が指示されているとも言え換えられよう。これら所在を規定する指示の連関は、この連関に即して上賀茂の地全体を経験可能にする基礎的な構造と考えられるであろう。さらにこれら所在を与える指示連関を「所在性」として明確にしておく。

しかし所在性という構造が上賀茂の地を全体として経験可能にする条件であるとしても、所在性そのものの基礎的な条件が如何なるものか、が明らかにされなければならない。再び野について考察してみるならば、具体的な包摂者である御生野は、最大の包摂者である神代の浦そして神原野の所在を規定する。しかし逆に、神代の浦・神原野は賀茂神の御生れ(御阿礼)の基礎的な条件になっている事に注目したい。神代という太古において神が降臨した(n,o,p)あるいは神遊の地であった(r)という、いわば神話的事実が確信されることを通して寧ろ、御生野において神が御生れる事が確信される²³⁾。即ち、神代の浦・神原野は御生野に大神「御生れ」の意義を与えていると言えよう。さらに御生野は御祓野、上賀茂御壇、仮寝野、御生所など個別の場所からその所在が規定されているが、同時に翻って御生野は個別の場所を「神事の場所」としての意義を与えている。最後にこの個別な場所が神事の場所としての意義をもつならば、これらの場所はそこで奉祭する人間の「行為」を意義づけている、と言えよう。

これら意義の連関全体を「意義性」とするならば、それは意義の連関に即し一定の意味ある場所として個々の場所を限定していると言えよう。そしてこの意義の連関は最終的に「野」の場合、人間の行為へと及んでいることは注目すべきである。ここにおいてはじめて本稿冒頭で問題とした「人間と環境」との問題を考察する手がかりを得るのである。人間は神事という行為を通して上賀茂の地全体を所在性という連関に即して経験可能にしているとも言えようが寧ろ翻って、上賀茂の全体から人間の行為が意義づけられていると考えられるであろう。とまれ人間と環境とのこのような動的な交錯する生きた関係あるいは往還する多重的な意味の連関構造の全体を、「上賀茂の場所構造」として把握し本節の結論としたい。

5. 神事における景観

前節では日常において上賀茂の全体的な把握を可能にする「所在性」「意義性」という二重の構造が指摘された。しかし一方でこの構造が全体的な把握を可能にしているとするならば、少なくともそれが帰趨すべきその地の全体的経験を「可能にする次元」が理論上の要請として示されなければならない。その試みとして、前節において最大の包摂者として定着された「神代の浦」に注目したい。神代の浦を在らしめる次元は少なくとも上賀茂の全体的経験を成立させる基盤にとって必要条件になると予想されるからである。

以下、神代の浦について詠われたとされる斎庭御視の日の古歌²⁴⁾『新古今和歌集』1868番歌の解釈を通して、神代の浦がその名の如く「神代」に於ける「浦」として現象する次元とは如何なるものか、を中心に考察してみたい。

早速、古歌をここに引くことにしよう。

賀茂社の午日うち侍なる歌

大和かも海にあらしの西吹かば

いづれの浦にみ船つながん

この歌は「日本に御舟をつなごうか。海の上にはげしい西風が吹いていたなら、どここの浦に御舟をつなごうか」²⁵⁾という程の歌意になるであろう。ところでこの「大和」とは上記口語訳で言われた「日本」のみを意味するものではないことは、伴信友が『瀬見小河 三』において「大和は海なき國なり、すべてとゞのはぬ歌なり」²⁶⁾と辛辣に批判する場合、所謂畿内五国の一である「大和国」を意味することからも明らかである。寧ろ大和国と解することの矛盾を避けるために口語訳では日本とされたとも考えられる。しかし後に考察される論旨からも本稿においては「日本」という意味で捉えることにする。先ずは神代の浦が「主題的に」如何なる場所として経験されていたか、に論点を集中させることにしよう。

第3節「野」の引用文(g)にも記された「舟着の入江」を地理的に確認すると、大間茂によって考証された様に「舟着」は丸山の西（現在の舟着町）及び西南麓（現在の葵の森町）をも包含する地名であった²⁷⁾と考えられよう。このことは現在の丸山北西の東上之段町・中ノ坂町と舟着町との間に約十数メートルの段差が円弧状に五百メートルほど南北に続いていることから、この地が舟着、舟差あるいは入江と云う如き海や湖の「浦」を髣髴させるに足る地形であることが傍証されよう。しかし問題は、単に地形の「見え」のうちに「天の磐船による神の垂跡」²⁸⁾の証左を見出すことにあるのではない。これこそ伴信友が評した如き「かの天の磐舟の偽説に始りて、みあれ野わたりを神代浦といひ、又船着など云う處もありて、その古蹟なりなどいふめるは、ともに論ふにも足らぬ謾説なり」²⁹⁾と言わざるを得ない。寧ろこの古歌において言い留められた次元こそが枢要なのである。

さて古歌に戻って考察をすすめるならば、歌には西風吹きさぶ嵐に荒れる海³⁰⁾と浦を確認する。無論、御舟を繋ぎとめるべき浦は「浪静なる磯」³¹⁾であろう。「浦」について『大言海』は「裏ノ義、外海ノ表二對シテ、内海ノ意、或ハ、風浪和ギテうらうらノ意、船ノ泊スルトコロ」とし、更に浦、裏、心、占の四語を同根と見ている³²⁾。つまり表面ないし表に対して「現れない」処という意味で等しく共通するのである。歌にも「いづれの浦に御舟つながん」とある様に、外海に於ける神には、未だ浦が明確に顕にはなっていない、ということからも明らかである。即ち詠われた浦とは、外海と連続した海

でありながら同時に「表」の外海に対して「裏」とも言うべき非連続な在り方³³⁾をも表示する場所として、一旦はその様に解することが出来るであろう。

日常において上賀茂という場所は、山間の狭小な山野であり西風荒れる海原とはどこまでも無縁である。しかし神事という特殊な日常において西に嵐ふく海に開かれ、静寂なる神事の場に於いて嵐吹きさぶ海原の潮騒が現れるそのとき、御生野以西が詠み手にとっても「神代」の「浦」として生じたのであろう。つまり神代の浦は神代の響きあるいは気配をその浦の如き土地に湛えて「神代」の浦となると同時に、その響きが現れる限り神の視線を共有する詠み手において確かにそこは御舟を繋ぐべき場所として海と連続する。即ち、神代の「浦」となるのであろう。過度の解釈は慎まねばならないが、少なくとも神代の響きあるいは気配にその場所が晒されなければ、上述された神話世界の出現も確信されない、と言うことは指摘してよいであろう。

ここで浦の如き土地が「神代の浦」として現れるという人間の理解を絶した出来事を「事」として受け取るとき、本居宣長の神代についての論考を引くことが許されよう。「奇異さ」が「奇異さ」の気配をあらわに保持しながら、それゆえに、「事」が「事」としてある状態が、「理」なるものの覆いかぶされないままにあらわれている場所こそが、宣長にとっては神代なのであった。」さらに「神代とは、…「事」が「事」たるままに「奇異く」ある事態が露呈している領域であった」と野崎守英は説く。宣長の神代解釈の是非はともかく、この神代解釈と重ねて考察するならば、奇異さそのものである神代の浦の露呈を主宰するものは「神代」という場所、領域と言えよう。つまり「神代の浦」として現れるには、その「奇異さ」の出来事そのものをその内に包摂し、露呈させる場が現前していなければならないであろう。野崎はそれを「神代の場」³⁴⁾と言い換え場的な性格を強調するが、本稿も神代の浦を顕しめる次元を「神代の場」として架設しておくことにしよう。しかしその仮説の是非は古歌に戻り直ちに確認されなければならない。

早速古歌の初句に注目する。峰文人はこの初句を「あれが日本であろうかな」³⁵⁾と解する。遥なる遠洋においてはじめて大和島根が神の視界に現れる将にその時「大和かも」と発語されたのであろうか。とまれ「あれが」という解釈のうちに距離感³⁶⁾を認めることは容易である。ところでこの「距離」について若干の考察を加えるならば、端的にそれは神と大和との隔たりに他ならないであろう。そしてこの隔たりは人間の思慮による計測可能な有限な量としてのそれではあり得ず、寧ろ神のみが現世へと降臨することを通して越えられるべき隔たりとも解されよう³⁷⁾。それ故切れ字「かも」は句の構成においても、初句で発語された「大和」とそれ以後に続く「神代」との間を将に「切る」ことによってその隔たりを表示する、とともに「切られる」限りその隔たりは連続することをも含めて示唆されているようか。多様な解釈を切れ字「かも」は許すであろうが、何れにせよそれに於いて大和と神代とが断ち切れ、双方の世界が「隔たる」ことを介して双方が同じ強度をもって確信されていることは指摘されるであろう。つまり切れ字を介して二つながらの世界が現れることを許す次元即ち、「神代の場」がその余韻として切れ字に表出しているとも解釈される³⁸⁾であろう。

以上「神代の浦」に即して見られた日常的な場所理解を支えるような世界の出現, しかも具体的な場所に即して経験される世界の出現の事態を改めて「景観的事象」として位置づけ本稿の結論としたい。

6. 結

様々な論点から考察されたことを纏めるならば, 日常における上賀茂の地の全体的かつ重層的な構造は, 神代の場に示される次元に裏打ちされてはじめてその全体性が保証される, という論旨となるであろうか。しかし全体構造とその次元とは単純に重なるものではない。このことは本節を通して詳述された様に, 「神代の浦」の生起という世界経験が確信されることを通してその重なり合いがはじめて成立すると考えられるからである。

上賀茂の場所性として考察された「所在性」「意義性」の二重の構造連関は, その都度有意味なそして個別な諸場所として上賀茂の地全体を限定するとともに, 指示するものであった(4.1 節 参照)。しかしこの全体を全体として成立させている根底的な動因を, 地理的には寧ろ周縁に位置し, しかも具体的な日常性に乏しい「最大の包摂者」(4.2 節 参照)が翻って「神代の浦」(5.節 参照)あるいは「山谷幽遠」「自然の通路」(2.節 参照)として現象し, 日常の生活世界の次元を越えた「神代の場」(5.節 参照)の如き次元を表示するこの働きに求めることは可能であろう。

しかし景観的事象としての「神代の浦」の生起は古歌の解釈を通して指摘されたのみであり, その現れの構造は考察されずに留まったと言えよう。今後の課題として「神代の場」において「神代の浦」の如き景観的事象が如何に成立するか, 具体的な神事の事例に即して明らかにされねばならないであろう。

謝辞

本研究をまとめるに当たり神道論の見地から藺田稔 京都大学総合人間学部教授から様々な御批判を頂きました。座田家舊蔵書の閲覧に関して國學院大學図書館整理課長・調査課長 磯貝幸彦氏の御世話になりました。記して御礼申し上げます。なお、本研究は平成8年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

註】

* 以下「日本建築学会計画系論文集」は「計論」と略記する。尚、京都叢書からの引用は註17)の凡例に基づいて本文中に記載した。

- 1) 藺田稔『祭の現象学』(平成2年8月, 弘文堂)における「風土祭祀」という論点からの考察, あるいは宮地直一, 影山春樹による神社の原始的な形態についての論考は, 宗教の問題が景観の問題として把握されており興味深い。
- 2) 「中世住吉社における饗膳の〈場〉について」(山野善朗, 昭和62年10月, 計論第380号)あるいは藤沢彰による諏訪上社本宮, 熱田神宮, 鹿島神宮についての一連の研究を挙げることが出来る。特に「賀茂別雷神社の橋殿について」(平成8年4月, 計論第482号)は本稿と同じく上賀茂社についての考察であり, 「橋殿の祭祀空間」の特性を境界という視点から考察していることは本稿の論点とも重なるところがあり注目される。
- 3) 森田慶一は『建築論』(東海大学出版会, 昭和53年2月)の中で「建築論は, この両者(引用者註: 人間と環境)のかかわり合いを, いわゆる建築環境学以前に遡った領域で扱い, 「建築とは何か」という全一的な課題の中に正しく位置させねばならぬ」(p.22ff.)と建築論の課題を提起している。

4) 御阿禮神事の起源について座田司氏は鎮座に関わる諸説を検討して「山城久我國移住に根拠を置いた説」よりは「崇神天皇の御代頃」を賀茂神の降臨・鎮座の起源に求める説を提出しこれを支持する。(座田司氏; 「御阿禮神事」/ 『神道史研究 第8巻』, p.73, 昭和35年)。

5) 座田 同上書によれば「祭員一同は先づ神酒三獻を頂き, ついで右の掴みの御料を盛りたる折櫃に白紙の上に掩いて掴み取つて食するのである。それを掴みの御料と稱している。」(p.92)とある。

6) 伴信友; 「瀬見小河」/ 『神道体系 神社編八 賀茂』, p.4, 昭和59年11月, 神道体系編纂会

7) 「中西日賀茂祭事」『年中行事秘抄 上』; 國學院大學図書館所蔵 座田家舊蔵書, 「炬火祭」の「祭」は「撃」の誤写とする伴信友の校正に従う。

8) 宮地直一 他 監修; 神道大事典(縮刷版), p1304, 昭和12年7月, 臨川書房

9) 座田 前掲書 4), p.73

10) 平野仁啓; 日本の神々 古代人の精神世界, p104, 昭和57年8月, 講談社現代新書

11) 折口信夫; 「貴種誕生と産湯の信仰と」/ 『折口信夫全集 第二巻古代研究(民族學篇1)』, p144, 昭和50年11月, 中央公論文庫

12) 肥後和男; 「賀茂傳説考」/ 『東京文理科大學文科紀要 第七巻』, p84, 昭和7年11月

13) 平野にとってミアレとは「神婚によって神の子を生むこと」(前掲書10), p105)であり, 折口にとっては「うまれるといふことではなく, あらわれる・出現・甦生・復活に近い意味」(前掲書11), p144)であり, 肥後は「ミアレは誕生の義であり, 神の來臨を意味する」(前掲書12), p.83)と両者の折衷的な解釈となっている。しかし平野・折口双方ともに「出現」という事態から考察されている点では寧ろ立場を等しくしていると言えよう。

14) 真弓常忠; 神道の世界 神社と祭り, p.178, 昭和59年12月, 朱鷺書房

15) 肥後 前掲書 12), p.82

16) 佐藤正英は「日常」と「日常を超越した〈なにか〉」との関係について「〈なにか〉は, 通常, ひとびとにとって現前してはいない。それは, いわば日常世界の背後にある。奇異しきこととしての出来事は, 日常世界の裂け目をひとびとにあらわにする。ひとびとは, そこに〈なにか〉の影を垣間みるのである。日常世界の裂ける可能性は日常世界それ自体に内在している。」(相良亨編; 「現世と超越-日本靈異記の世界」/ 『超越の思想 日本倫理思想史研究』, p.17, 平成5年2月, 東京大学出版会)と論考している。この論点は第5節で考察される。

17) 以下, 「新修 京都叢書」(野間光辰 編; 昭和42年10月, 臨川書店)によって考察を進める。尚本文中に出典註の凡例は以下の通りである。「京羽二重織留」/ 『新修 京都叢書 第2巻』, p.362)であれば, (京羽二重/2/362)と(書名・巻数/京都叢書巻数/記載ページ)の順に表記した。尚, 書名の略記号については以下の通りである。

京羽(狐松子 撰; 京羽二重織留)/ 京す(作者未明; 都すぐめ案内者)/ 京鑑(蘆田純永 撰; 京町鑑)/ 名都(作者未明; 名所都鳥)/ 花月(秋里籬島 著; 都花月名所)/ 都園(秋里籬島 作; 都名所圖會)/ 雍府(黒田道祐 撰; 雍州府志)/ 京巡(釋文愚 撰; 京師巡覽集)/ 洛名(山本泰順 撰; 洛陽名所集)/ 出齋(淺井了意 作; 出来齋京土産)/ 上行(黒川道祐 撰; 上賀茂行程)/ 菟(北村季吟 撰; 菟糞泥赴)/ 京勝(貝原篤信 撰; 京城勝覧)/ 山名(大島武好 編; 山城名勝志)/ 山跡(沙門白慧 撰; 山州名跡志)/ 京歴(京都市; 史料京都の歴史)とする。

また本文中において史料分類の凡例は以下の通りである。

例; ①御生野(御生所野, 御形野, 御祓野, 假寝野邊)であれば, 「i」は次頁の地図番号, 「御生野」は地名, 「(御生所野, …)」は別名, を意味する。

18) 『官幣大社 賀茂別雷神神社由緒略記』(官幣大社 賀茂別雷神神社々務所; 昭和12年

- 5月「斎院小御所跡」の条(p.38)には、「社務所の西の林中に在り、…斎王参向の時の小御所なり。其庭を流れたる小川を有栖川と謂ひ、…此邊の芝を假寝の芝と云ふ。」とある。
- 19)柳田國男;『地名の研究』/『柳田國男全集 20』,p.33,p.77,平成2年7月,ちくま文庫
- 20)本節では「全体(性)/包括(性)」を区別して論じているが、その概念的な差異は次の通りである。全体という場合は「一つの全体」を、そして包括という場合は「分節可能な一単位」を意味している。より具体的には、地理的には広範囲に亘るが、諸々の場所を一義的に統一しているような地名に対して「全体性」とし、一方地理的には纏まりのある一単位であるが、そのうちで具体的な諸場所へと分節可能な状態にある地名に対しては「包括性」としてそれぞれの性格を区別する。
- なお本稿では「全体」という術語を使用するが、『哲学事典』(平凡社,昭和46年4月)の解説を借りて説明するならば「諸部分からなる統一体ではあるが、任意に集積される諸部分の単なる総和ではなく、それ自身の意義と本質を有」する(p.847A)「一個の全体」(p.848B)として「全体」の意味を定義しておく。
- 21)官幣大社賀茂別雷神社々務所;賀茂別雷神社由來概要,p3,発刊年および発刊元不明。京都府総合資料館所蔵。神山についてその詳細は他の文献で確認できなかったが、同書において衣笠峯の左右の山を狸山、長尾と呼ぶ。
- 22)しかし『三州名跡志』の報告によれば、この三山はともに「神殿東山是也」(f)といわれ即ち「神宮寺山」のことになる。また同書において「賀茂山」と「鴨山」とを書き分けていることからあるいは、三山の名は丸山に帰すべきか、尚検討の余地はあるであろう。尚、丸山・小丸山の山塊が多様な呼び名をもつことは、稿を改めて考察したい。
- 23)「新古今和歌集」1892番歌 賀茂重保の歌に
跡たれし神にあふいのなかりせば
なにゝ頼みをかけてすぎまし
(田中祐・赤瀬信吾 校注;新日本古典文学大系 11 新古今和歌集,平成4年1月,岩波書店)とある。この歌の解釈として「悠久の太古に於いてこの賀茂山に降臨垂跡せられた賀茂の大神に時節到来して、もう一度吾々が会ひ奉る日が来ないのであるならば吾々賀茂の神官は何の希望があって、この至高至厳の潔斎精進を要する御阿礼祭を奉仕することがあらう。」(井出岩多;賀茂別雷神社の御祭神に就いて,p.21,昭和41年12月,出版社未明 京都府立総合資料館所蔵)と言われる如き大神降臨垂跡の伝承が御阿禮神事を奉斎する者にとっての確信を支えている、と指摘できる。
- 24)現行の御阿禮神事では御榊神幸の際、宮司以下祭員五員神館にてこの秘歌を奏するという(坂本和子;「賀茂社御阿禮祭の構造—阿禮乎實の奉仕を中心として—」/『國學院大學大学院紀要 第3輯』,p.105,昭和46年)。また「賀茂皇太神宮記」に「さてとしごとの四月の祭は。午の日東河原にいでて祓したまふ。これを斎院の御禊と申奉る也。」(『群書類従 巻第十五』訂正三版,p.454,昭和7年10月初版・昭和54年11月訂正三版,統群書類従完成会)とある。また斎王禊ぎの場所について川出清彦は「古来祭日(酉日)の前の午又は未の日を卜定して行われてゐる。禊川は東川が原則であるからこの場合も賀茂川を用いられてゐる。」(「斎院内の生活をしのぶ—大斎院前の御集を読みと—」/『神道史研究 第16巻』,p.32,昭和43年1月,神道史学会)と考証する。
- 25)前掲書23) 尚、代表的な口語訳を比較すると、初句の扱いが訳者によって異なる。峰文人は「あれが日本であろうかな」(日本古典文学全集 新古今和歌集,p.557,昭和49年,小学館)と「大和」に対して疑問・詠嘆の意を強く

- 出しているが、管見が及ぶ限り「いづれの浦に」をうけて「日本に繋ごうよなあ」(石田吉貞 著;新古今和歌集全註解,p.798,昭和35年3月,有精堂出版)あるいは「大和島の岸にしようか」(久保田淳 校注;新潮社日本古典集成 新古今和歌集 下,p.289,昭和54年9月,新潮社)と訳するものが趨勢である。
- 26)伴 前掲書6),p.97
- 27)大間茂;「神山小考—賀茂の神体山をめぐる一、二の問題について」/『神道史研究 第34巻 第2号』;p.38,昭和61年4月,神道史学会
- 28)「垂迹」とせず「垂跡」としたのは、註23)にあげた「新古今和歌集」1892番歌(賀茂重保)による。ただしこの偽説として名高い「天の磐船」伝承については、「賀茂皇太神宮記」(『群書類従 巻第十五』所収)、「大和豊秋津嶋卜定記」(『群書類従 巻第二十三』所収)、そして貴船神社の玉依姫「黄船」伝承などを検討する必要がある。
- 29)前掲書6),p.98
- 30)峯村は二句目の「嵐」は「荒し」をかけている」とする。(前掲書25),p.557)
- 31)「大和豊秋津嶋卜定記」に「天鈿女命波。盤樟船弘漕奉利。神代乃浦乃波靜奈留磯迄送利御座之木。」(前掲書28)『群書類従』,p.241)とある。
- 32)大槻文彦;新編 大言海,昭和57年2月,富山書房,尚白川静も「外海に対する内海で、「裏」「心」と同根の語。それを地形に用いたものである。」(『字訓』,p.164,平成7年2月,平凡社)とする。中山襄太も『国語語源事典』(p.105,昭和51年7月,校倉書房)において『大言海』の説を支持する。
- 33)野崎守英;本居宣長の世界,p.154.ff.,昭和47年5月,塙親書
- 34)同上書p.148
- 35)久保田 前掲書25),p.557
- 36)久保田は「賀茂の神が異国から渡来した事を暗示する」(前掲書25),p.557)と解釈するが、この「異国」という表現にも距離感を読みとる事ができる。
- 37)この「隔たり」という論点に関して、西垣安比古は香頭歌^{ヒヤンダウカ}の解釈を通して「ここに詠じられる遠さはただ単に物理的距離としての遠さではないことは言うまでもないのであり、そうであってこそ家の大門の外がただちに、その様に遠いはずのあの世であり得るのであろう。」(「朝鮮の「すまい」に於ける内と外—生と死の通過儀礼をめぐる—」,p.129,平成元年9月,『評論 第403号』)と論考している。この解釈を直ちに本稿の「隔たり」の問題と重ねることは慎まねばならないが、本来次元を異にする場所秩序が非日常的事態にあって日常のそれと重ね合わされている事態の様態の一例として本稿の論点を鮮明にするであろう。
- 38)「切る」ということを通して根底に潜んだものが表出されるという論点は『「切れ」の構造 日本的美と現代世界』(大橋良介;昭和61年11月,中央公論社)などを参照にした。例えば「この切れ字によって、自然な時の流れも切れ、自然的生命の本来の時間性があらわれてくる。」(p.92)などは、少なからず本稿の論点に重なるであろう。

(1996年12月5日原稿受理,1998年4月16日採用決定)